



四国は山国である



pinokopapa

四国の山々 2

四国は緑の国でもあるが、実は山国であるということから、うるしにことに話が飛びました。

地図を見ましょう。Google Mapとかではなく、学校の地理で使っていた日本地図です。それを見れば一目瞭然。四国は平野が少なく、あとは緑の山ばかり。Google Mapでも航空写真をみれば、一面に山が広がっているのを確認できます。緑でないところ、つまり平野は白く見えますが、四国は香川県に平野が一番多く、あと愛媛の松山辺り、徳島は吉野川沿い、高知は海岸線が白く見えるばかりで、平野のないことがよくわかります。

それでも香川は、いつも水不足。県内に千二百余りのため池を作り、米を作ってきました。しかし、近年はそのため池を管理する農家がだんだんに減り、ため池の管理をする人がいなくなってきております。空家率は全国で三番目。香川はいま、有数の老人県になりました。

昔学校で習った時は、四国山地は四国山脈でありました。さらに四国にはもう一つ、讃岐山地があります。当然、これも讃岐山脈と教わっておりました。四国はこの二つの山地によって山国となっております。しかし、日本で一番小さな県の香川県に、独立した山脈があるなんて、ちょっと不思議な感じがします。

さて、四国山地は、四国の中央部を東西二百キロにわたって貫いており、しかも中央構造線を流れる吉野川の南に、千数百メートル級の急峻な山々が連なっております。その連山も名前のある山だけで六百以上。くわえて、西日本最高峰もその中にあります。石鎚山、千九百八十二m、そして剣山、千九百五十五m。しかし、四国では、日本百名山にはこの二山しか入っておらず、中国地方も大山一座のみで、名山の少ない地帯かとも思っています。

讃岐山地のことも紹介しておきます。讃岐山脈は、香川県と徳島県の境界に位置する山脈で、阿波と讃岐の間に南北によこたわっていることから、阿讃山脈とも呼ばれたりもします。四国山地も讃岐山地も、その間を吉野川が流れて山肌を侵食してきたことで、讃岐山地は南側、四国山地は北側が急峻で、このことから、そこに住む人々の苦勞ができてきます。

徳島、四国山地といえは、平家の落人伝説と祖谷のかずら橋ですが、それはともかく、このあたりの山は、剣山とそのお隣の山を除いて、標高千三百～四百mの山が連なっています。しかも、そのあたりまで人里があり、いまも人が暮らしております。

さて、さきほどのかずら橋ですが、今かずら橋に行くと、観光センターのようなものができて、人は駐車場から観光センターへ流れるように誘導されたせいか、それまでの土産物屋さんには閉業してしまいました。しかし、その土産物さんの店先には、このあたりででこまわしと呼んでいた名物がありました。それは、ほどもこの地方では呼ぶじゃがいもと豆腐、こんにゃくを竹串に刺し、みそだれをつけて炭火で焼く田楽のことです。回しながら焼くようすが「でこ(人形)」に似ているので、この名がつきました。では名物だから美味しいのか、珍しいのかというと、そうではなくて、このあたりでは米を作ることができなくて、ほども、ジャガイモと蕎麦を作ることではか生き延びられなかったから懸命にこれを作っていたのでした。

貞光町に住んでいた人がおりました。この人が高校に通うためには、朝6kmを下って、夕方また6kmをのぼらなければなりませんでした。古い話ですから、往復とも徒歩でありました。その集落で、この人の家は山の一番てっぺんで、そのあたり、父の実家と同じでした。今は滋賀県に住んでおり、つい最近まで、もう誰も住んでいない実家へ四駆を駆って上がってゆき、家の手入れと墓参りをしたりしておりました。帰ると、家の中に蛇の抜け殻が二三本あったりするそうです。しかし、もう年も取ったので上がってゆくこともままならなくなり、墓参りと家の前の雑草刈りを町のシルバー人材センターに頼み、写メールで確認して代金を払うという方法を取るようになりました。それでも帰りたいと切望しているようです。すこし認知症のようになっていても、いや、柔らかい言で言いましたが、明らかに認知症になっております、それでも山に帰って一人暮らしをしたいと、ふもとの大工に頼んで、戸はアルミサッシに替え、雨漏りも修理してもらい、それも写メールで確認して大きなお金を支払いました。村は帰っても、もう人のいる家は300m下まで離れていて、あと何人残っているかはわからないそうです。女一人でそんなところ、住めるはずないだろうと助言させています。七十近くの、認知症気味の女性が暮らせるはずない、それでも帰りたいと毎日思っているそうです。

貞光町は市町村合併で一宇村、半田町と合併し、今はつるぎ町になっています。貞光町からさらに南に急峻な山道を超えると、猿飼地区というところがあります。猿飼集楽ともいわれます。この地も同様に急峻な山肌であることは変わりなく、それでも今も十軒ほどの民家があり、そこに十二人の人が住んでおります。この人たちが耕作しているのがジャガイモでした。春に種芋を植え付け、晩夏に収穫します。それこそピンポン玉より小さなものまで有り難く拾い集め、冬の食料にします。

この地は二十度から三十度の傾斜の畑しかできず、先ほどのジャガイモを植え付けるにしても、風が怖いというような地で、しかも手入れを怠ると土がみな流れてしまいます。それゆえ、畑の上側に立ち、鍬で耕すだけでなく、一回一回、土を上を掻きあげます。それが、この地での知恵でありました。

また、家の横に茅場を持っております。この茅が畑に欠かせないものです。晩秋から冬にかけて、その茅を刈り取り、それを畑に撒いて肥料と日焼け防止と、保水材にします。そして腐れば土にかえります。これも昔からの知恵でした。そしてジャガイモこそ、やせた土地で豊富に収穫できる作物でした。

ほかに、蕎麦があります。この高地の畑にきれいな蕎麦の花が一面に咲きます。祖谷蕎麦が有名ですが、このあたり一帯でできる蕎麦の総称が祖谷蕎麦でした。しかし、こ

のあたりでは、蕎麦に打つこと以外の食べ方も伝わっています。そば米雑炊といいます。殻を取り除いたそばの実にごぼう、にんじん、大根、椎茸、ねぎなどの野菜と、鶏肉、豆腐、ちくわなどを、薄口しょうゆと昆布、いりこなどのだし汁で煮た料理です。ほかではこういった食べ方はないと思いますので、郷土料理だとおもいます。

猿飼地区、猿飼集落といいました。標高千三百m近く、麓までゆくのに十五Kmほど距離があります。下りればコンビニもスーパーもあり、病院もあります。しかし、ここは取り残されたように、何にもありません。電気こそ通っておりますが、水道は山の水。テレビもNHKとローカル局一局。それでも動きにくい人には唯一の娯楽。一日それを見て過ごします。でも、外へ出れば、天空の里です。猿飼地区天空と書いて、ソラと読みます。剣山系、天空の里、ソラです。

今でこそ、香川から高知に行くのは高速を使いますが、普通道路、下道を使うなら三十二号線でありました。この国道の途中、香川県三豊市から徳島県三好市にかけて讃岐山脈を超えていく峠を猪鼻峠と呼んでおります。この峠はなかなかの手ごわい急勾配と急カーブが続きます。箱根峠も知っておりますが、それほどの距離と急カーブの連続ではないものの、百八十度向きを変えるヘアピンコーナーが二つと、それに近いカーブが多数あり、ここで峠越えに慣れておけば大抵の山越えは楽に行える自身が付きます。間には上りも下りもトンネルがいくつかあって、ヘアピンの曲がった途端のトンネルは、一度に視界が暗くなり、怖い思いをすることがあります。まして、下りの大型トラックとこのトンネルですれ違うなんて時は、身の縮む思いをすることがありました。

ところが、この大型トラック、上りで後に付くと、エンジンの唸りと排気ガスのおい、まるでデンデムシのようなスピードに最悪な思いをさせられました。といって、追い越し禁止を追い越していく勇気もなく、黄色の中央線が恨めしいばかりです。さらに、先はカーブの連続ですから、対向車の危険は絶対あります。それでも前に行く車が、鮮やかに抜いてゆくと自分もと思うのですが、抜けるチャンスはそうそうなく、抜こうとすると対向車といった具合で、ちょろっと鼻先をのぞかせては引っ込むの繰り返し。すると、トラックが避けて、後続車を先に行かせてくれることもありました。しかし、大半がいつまでもずるずると引っ張り、まるで大名行列の体をなします。しかし、それも十五分から二十分の我慢で、あとは下りになり、ストレスなく走り出せます。これも国内の材木がまだ需要のあった時代のことでした。もうトラック先頭の大名行列も、池田町の製材所もなくなりました。三好農林高校も統廃合されて校名が変わっておりました。

香川から徳島および高知へ抜ける主要幹線は、たとえどこかの区間だけ一車線しかなくとも、おおむね片側一車線以上、両側二車線以上と限定するのなら、以前は猪鼻峠と塩江街道だけでした。実際には讃岐山脈を超える峠は十九本ほどあります。そのほとんどは林道を整備しただけの、ひょっと対向車がきたら、かわすのにどうしようと考えながら走らなければならない道です。それらのうち、高低差がきつくて、フットブレーキだけでは絶対危険だと思わせる峠が、少し前に開通しました。三頭越と言われた峠です。この峠の頂上は、徳島県側に下り始めたところから、長いトンネルが続きます。その壁の側面にあと何メートルという表示が次々と続くほどです。

しかし、こういった整備された道とは逆に、もう振り向かれない峠も残っています。香川からなら大野原町が起点で、出口は猪鼻峠の野呂内というところまで通じた峠がそれです。香川の愛媛への幹線から南に入る途中までは二車線が続き、車も通らず、快適なのですが、いきなり林道かと思わせる様相になり、もう車を回して帰ることもできない道になります。道は一本で、交差も分岐も致しません。その峠の始まりを薬師峠といいます。そして、山の尾根下の林の中を曲がりくねって、ラリーのように走らなければならない道になったところが六地藏峠です。そこは昼間でも光が差し込まず、頭上一面杉木立に覆われています。たぶんもう車は通ることはありません。人さえ通りませんから。しかし、それでも本当の六地藏峠は、千m級の山の稜線を通っていたようで、現在の道に、以前の道に安置されていた地藏が移設されたという解説が残っています。もし、うっそうとしたという表現がどんなところを言うのか、知りたければ、この峠を越えてごらんになればいい。これより西にある曼陀峠も険しいけれど、これほど不気味ではありませんし、曼陀峠はまだ通る車があります。なにせ、雲辺寺へ車で行くなら、これを行かなければなりませんから。しかし、もしこの薬師峠から六地藏峠を超えてみようと思われたら、転落しても発見されにくいと覚悟されたほうがいいかと思います。四国は山国なのでから。

四国のへそを名乗る町がありました。今は市町村合併で三好市となっていますが、旧池田町がそれです。といっても四国の真ん中にあるわけでもなく、鉄道の分岐点というほどでもありません。ところがです、国道は池田町を要にして、50km 北東に高松市、70km 東に徳島市、70km 南西に高知市、110km 西に松山市という位置にあります。つまり、国道の要衝。池田からは四国各地に行けるという意味でのへそだったのでしょう。実は、その重要さをわかっていたのは、長曾我部元親でありました。彼は四国制覇、四国統一を狙い、土佐からまずこの池田を攻め、阿波の白地城を攻めて大西覚養を討ちます。それを済ませて、讃岐へ侵攻し、武力の威嚇をもって香川之景(香川信景)と和睦し、なんと2男・長宗我部親和を養子として送り込み、香川親和(香川五郎次郎)と名乗らせます。つまりはお家の乗っ取りを黙認させるわけです。

ここまでで、香川氏が香川県の県名になったような雰囲気を感じられているかと思いますが、じつは、違うのです。香川県は香川県として統一されるまでに紆余曲折がありまして、それはそれは、日本一小さな県であるにも関わらず、高松県だの丸亀県に分かれてみたり、また引っ付いてみたりと第三次まで繰り返します。屁理屈、意地の張り合い、自己中の香川県人の真骨頂かと思われます。この県名は、高松があった香河群から来た地名で、奈良時代の和名抄にそのような記述があるそうです。香るというから良いにおいのように思われますが、そこは日本一雨の少ない県です。川が枯れて枯れ川となり、その枯川転じて香川となったとか、樺の古木が川に落ちて腐り、そのにおいが充満して香川となった、いや、温泉の臭気が匂ったから香る川の香川県となったとも言われております。よくその地を治めた豪族の氏が地名となって残っている例が多いのですが、香川の県名はそうではないようで、香川氏は香川県の県名とは関係ないのでした。

四国中央市金砂町平野山というところに、翠波高原があります。ここにたどり着くには、思わぬ傾斜の道を車で上がっていかねばなりません。鼻先の長い車だと、道の頂点に達すると、その先の下りの道が右に曲がっているのか左なのか、本当に下っているのか、わからないほど急な道です。当然車はロウギアで、ウンウン唸ってばかりで焼け付きはしないか、心配になります。これは天狗高原に行った時も同じでした。しかも道は小さなカーブが連続して続き、片側が崖というわけではないので、道を外れても山の斜面をずるずるとずり落ちるぐらいで済みそうですが、道を外れたくはありません。季節になると、そんな道を車が連なって上がっていきます。花がきれいです。それもだっ広い広さなのです。春は黄金色の菜の花、夏から初秋はコスモスの花。広さは第1園が約2ヘクタール。第2園もあって、これが約1ヘクタール。第3園は約は1ヘクタール。しかし第3園はミツマタが植えられており、花はありません。標高892mしかないのですが、駐車場から息を切らして上ると、翠波峰に約100haの高原が広がっており、しかも頂上からは、瀬戸内海の島々と四国山地の両方を眺めることができます。こういふと、大絶賛のように聞こえますが、実はこれしかありません。花一面の高原です。ちょっと数少ないですが、トイレはあります。一面の菜の花が風に揺れます。

何年も前のことです。充分は覚えておりませんが、午前中に須崎の道の駅に着いて、そこに行けば鰹のたたきを食べなきゃいけませんと聞かされていたので、待ちました。お昼時にならないとたたきはやらないというので、他の客と同じく、待たされて、半分怒って待っていました。もう道の駅の中は見回って、見飽きるほど見たので、鰹のたたきの販売するコーナーの、今でいうイトインの椅子に座って待ってました。私は、本当は刺身は苦手なんです。しかし妻は無類の魚好きの親の娘ですから、それなりに好きで、辛抱強く待ちます。私はというと、魚臭さのにおいの不快さに、気持ち悪くなって怒ってました。そうこう三十分以上待っていると、コーナーの前でドラム缶にわらを放り込んでおります。そして、火を点けると、ほんの一瞬後に炎が天井まで燃え立ち、牧草を扱うような鍬に鰹を乗せて短時間焼きます。通常は、それを通常は氷水に漬けてしめるのですが、ここではそれをせず、そのまますぐに切り、パックに乗せて手渡されたとおもいます。口に入れたとき、ほの暖かかった気がするからです。氷水で冷やすと味が落ちるとというのが店の言い分、そして自慢でありました。しかし、刺身嫌いの私を転向させることはできなかったのです。

そこで思わぬ時間をくったわけですが、それはそれで良いのです。ここからあとは、どれほど時間がかかるかはわかりませんが、四国カルストへ上がっていただけです。四国カルスト、天狗高原。日本三大カルスト、山口県の秋吉台、福岡県の平尾台、そして四国カルストです。標高は一四八五m。眼下には太平洋と石鎚山系の山並みが前後にひろがります。しかし、運よく晴れた日にいかなければ、見ることはできません。秋は曇り空が広がり、風吹きすさび、雨か、もっと冷たいものが頬を打ちます。天狗荘に一泊したのですが、着いた日も帰る日も、こんな天気と一緒にでした。

標高千五百m、この四国カルストは戦後開拓地として、たくさんの方が入植してきました。私が観光に行ったのは秋だったのですが、ひどい悪天候で寒さに悩まされました。この地はそれほど過酷な気候の地で、北海道南部と同じか、それよりつらいと言われております。そんなこの地へ、確か、満州からの引揚者が入植したと聞いています。最後の開拓地と言われました。四国カルストは、その高原に石灰岩が露出し、生えているのは一面笹です。それもひどく根を張った笹でした。入植者はここに何とか作物を植えようと、畑を開きました。それが大根でした。それを植えられるようになるまで何年かかったか。巨大な石を動かし、薄い土壌に種を蒔き、収穫を待ちます。しかし、連作障害は次の作物をはねつけました。ですから、この高原を切り開いて、この地に定着しようという人は次第に減っていきました。それをひっくり返したのが、牧草の栽培でした。草しか生えないのなら、草を生やそうという逆転の発想でした。そこから、牛の放牧が始まり、酪農がこの高原に根付きました。簡単な針金一本で囲った放牧地に、牛が草を食べてのんびりしています。その先に風車がいくつか並んで、重低音の不快な唸りをたてて回っております。

四国カルストは、現在は有数の観光地になっています。標高千五百mが下界とどれほど違う環境かと知ることができます。物見遊山の観光の地ではありません。南国の四国で、北海道並の気候を味わえるとお思ってください。

四国カルストについて、うる覚えを書きましたが、よくよく調べてみると、四国カルストであっても、入植者が高原にしがみついて自然と闘ったのは大野ヶ原でありました。それも昭和二五年からの、国の食料増産の奨励に応じた入植でありました。私の記憶違いは、その人たちが満州からの引揚者が多くを占めていたという点です。実際は空襲等で焼け出された普通の人たちが、政府の一家族四〇〇ヘクタールの土地を保証するという言葉に夢を抱いての入植だったようです。しかしながら、所詮は素人ばかりだったようで、開拓開墾などといっても何をどうすればいいのか、一から知らない人たちでした。まして四国カルストです。水道も電気もなく、夜露をしのぐ場所さえ自分で確保することから始めなければなりません。当初入植したのは五〇人であったそうです。しかし、石灰岩の巨石がむき出しになってゴロゴロしている高原です。土壌は酸性が強く、作物の育たない地質でありました。ですから、ほんの少し切り開いた土地にも作物は実らず、わずかに大根ぐらいが取れただけでした。

今でいう、ライフラインがまったく整備されていない地で、一番に困ったことは水の確保でした。それについては、山間部ではあってもため池はあったそうです。水はその池の水を汲むしかなく、飲み水といえどもそこから汲んで沸かして飲んだとか。すると、春先にはオタマジャクシが沢山入っていたそうです。そのような苦労をしても、この高原はなにももたらしてはくれず、結局多くの人が山をおりました。残った人たちは、ある名案を考え付きます。酸性土壌であるならば、そこそこに転がっている石灰岩を割って撒いてみようと考えたのです。しかし、それが容易ではありません。結局石工さんたちの使う大ハンマー、げんのうというものを振るい、小ぶりの石灰岩を細かく割っては散布しました。ついで、牧草を植え付けていき、それが茂るのを待ちました。土地を切り開き、石灰岩の砕いたのを撒き、牧草を植える、そうして、最初は六頭のホルスタインから始めて、牧畜を行うようになりました。現在は大野ヶ原には六〇〇頭のホルスタインが放牧されているそうです。それが一応の成功を見るのに昭和四〇年ごろまでかかりました。

入植一世は現在八〇を半ばにまでなっております。彼らは、その間に子供を育て、牛を増やして暮らしの立つように頑張ってきたのでした。彼らは、苦労話を楽しかったことのように話します。いま、四国カルストは観光名所として宣伝しております。容易ではなかった昔のことは、もううかがい知れません。

徳島県は謎の多い県です。余りに辺鄙で、山が深くて、人が近寄りがたいということもあるかもしれません。もっとも、さしたる観光資源もなく、あるのは山ばかり。だから余計に、誰も来ないのかもしれませんが。けれど、今では吉野川のラフティングなんか、有名になりました。その以前は、吉野川下りがあって、木造船で川を下ったりしましたが、これはこれで小歩危峡まんなかというところから、大歩危峡観光遊覧船として今も頑張っているようです。ラフティングなんかで有名くらいですから、川下りもスリリングなことは間違いなしなのですが、日本三大川下りとか、三大急流なんてものには入っていません。これも四国だからです。本州じゃないから、知られていないから、それだけのことで、正当な評価が得られていない。まことに残念なことだと言わざるを得ません。

と、負け惜しみを言った後ですが、四国もまた知られざる温泉大国です。山国四国に火山はありません。穏やかな山ばかりです。その山の上にさえ、温泉はあります。香川でいえばみかど温泉。美霞洞温泉ともいっておりましたが、現在の温泉施設はエピアみかどといい、先的美霞洞温泉から温泉を引いております。そして、ここは当地でいう三頭越えの難所の頂上にあります。少し行けばほぼ同じ標高で、讃岐山脈最高峰、1080mの竜王山、そんな高さなのに、温泉をくみ上げれば出るのでから不思議です。

徳島にも秘湯があります。場所は、徳島県三好市池田町松尾黒川2の2。ホームページからコピーしましたから間違いありません。名前は地名通り、松尾川温泉。お湯は、原泉かけ流しのアルカリ性単純硫黄泉。これだけ見ると、ごくありきたりの、普通の温泉のように見えますが、お湯が違うのです。これほどの温泉を外に知りません。無色透明でいて、なおヌルヌルの肌触りです。日本三大秘湯といえば、北海道ニセコ薬師温泉、青森県谷地温泉、そして徳島県祖谷温泉といわれるのですが、すぐ近くの祖谷温泉の何十倍もの泉質です。ただし、日帰り温泉で、まるで和モダンな建物の中央の窓口で代金を払い、扉を開けるといきなり脱衣室があって、その奥が浴室。ところが小さいのです。人がいません。まるで貸し切り状態で、銭湯より小さな湯船につかると少し熱めの湯が心地よいです。

併設されているホテルがあります。そこの二回の食堂で、軽い食事は出来るのですが、夕方は午後五時までが準備中、ラストオーダーが午後六時。うどん蕎麦一杯二五〇円。あとちらし寿司があって、メニューは簡単なものばかりです。しかし、あまりの商売っ気のなさには、あっけにとられます。これたべるけ、と大きな夏みかんか八朔でしょうか、いただきました。湯治に来れば一泊三四〇〇円ぐらい、三泊以上で一泊二七五〇円ぐらい、日帰り入浴は五一〇円だったか。ホームページもありますので、お確かめください。木の実やらゼンマイ、キノコが山の恵みであるのなら、こんな温泉も山の恵みかとおもいます。かってに観光大使でした。

後回しにしていた讃岐のことを語らねばなりません。讃岐といえましょう。うどんだけじゃない、香川県。いまそういったキャッチフレーズで香川県がアピールしていますが、本当にそれだけではないと言えるのは、ため池でしょう。地図を拡大して観察してみてください。普通の地図のほうがよくわかります。航空写真にかえると、地形に混じって、逆に分かりにくくなります、水色の不規則な形のシミのようなものが大小入り混じって、まるで水玉模様です。その数、約一四〇〇。西日本一降雨量の少ない香川県は、反対に、稲作に適した平野の広がっている県でした。その地を生かそうと、営々と築いてきたのがため池でした。

香川県の三大ため池は、まず満濃池、次が神代池、そして三郎池です。三郎池は高松市の三谷町にあり、通称仏生山街道から平和公園へ向かう道のそばに広がっていて、年に二・三回そのそばを通り、間近に見ておりました。というのも、平和公園は高松市の市営墓地公園で、この墓地公園がまだ造成中から叔父がその一角を予約し、私の祖父の墓がそこに建てられたからでした。それから何十年か立ち、今は二人の叔父と叔母一人の墓が増えました。行くと、手帳を広げなければなりません。九区画のEの九番とか、覚えきれないからです。墓の形は統一されており、それでは見分けがつかません。祖父と合わせて四カ所ともなれば、探して歩くには広すぎます。しかし、こうして平和公園に来るたびに広い水面の池を見ます。はるか向こうの対岸に山が見えます。

水に苦勞してきた香川には、外に豊稔池と府中湖ダムがあります。このような農業用水ダムほかに砂防ダムも加えると、香川には六三か所のダムが存在します。これが多いのか少ないのか分かりませんが、この日本一狭い県土に池一四〇〇〇、農業用ダム六三は、いかに讃岐が水に苦勞してきたかを物語っています。かつて、あの高松砂漠と言われた昭和四八年、ときの香川県知事が、徳島の県知事に吉野川の水をもう少し多く分けてくださいと頭を下げて、結局断られたことがありました。吉野川の水は徳島県民のものだから、というのがその時の徳島県知事の答えでした。県民の意識が許さないとまでいったのです。しかし、吉野川の水と言っても、その大本は早明浦ダムであり、香川県はその建設費を徳島県に負けないぐらい負担しています。そういった経緯もあり、香川県は出来るだけ他県に頼らなくても水不足に陥らないように、様々なところにダムを造り始めました。同時に、政治力も使いました。時の大平正義外務大臣、成田朋美社会党委員長、この二人に国政の場で働きかけをやってもらったのです。その結果が、香川用水でありました。池田ダムから讃岐山脈を貫通しているトンネルを経て、香川県内一円に農業用水、水道用水、工業用水を供給しているここからの水は、今も香川を潤

しています。

湯水の話ばかりがクローズアップされて、実は大変な水がめがあることを見逃しそうになります。それは、京都とよく似たことです。

京都の地下には、巨大なダムが眠っています。それゆえ、京都には名水、湧水がたくさんあります。京都盆地には、琵琶湖の三分の二の量に相当する地下水があるからです。ですから、京都市内には～の井とか～湧水、御神水、と名付けられた井戸、湧水が各所に点在しています。

実は、湧水の地、高松にも豊富な地下水をたたえた地下ダムが存在しています。高松クレーターといいます。これは、高松市仏生山町ある高松藩の歴代藩主の菩提寺、法然寺付近を中心として直径約4kmの円形を描き、深さ1～2kmの地下に達するカルデラ構造の地下ダムです。この成り立ちには様々な説があり、隕石衝突説と火山カルデラ説が唱えられていますが、いずれにしても、これが形成されたのは第三紀中新世の1400-1300万年前頃と考えられます。ということは、まだ人類が存在しなかった頃にできたもののようです。

それにしても、現在の四国に火山は存在しません。にも拘わらず、たとえば屋島は約1300万年前～約1500万年前に、瀬戸内火山活動の溶岩などでできた讃岐層群からなる台地と言われております。ほかにもサヌカイトが存在します。サヌカイトは非常にまれな岩石で、この讃岐のほかには奈良県香芝市の二上山に存するだけで、この二上山から採取される古銅輝石安山岩もサヌカイト、讃岐岩と呼ばれます。そして、原始時代には鋭利な石器として使われました。また、産出地以外の遙か遠方でサヌカイトの破片が発見されておりますから、これも古代、貴重品として流通していたようです。

まるで火山カルデラ説が当然のように話を進めてきましたが、隕石衝突説もあります。実は過去に、香川県に隕石が降り注いだことがありました。国分寺隕石と言われております。この国分寺隕石、一九八六年七月二九日に、当時の香川県国分寺町と坂出市に、一〇〇個以上の隕石破片が降り注ぎました。もう三〇年も前のことですから、はるかに忘れ去られておりますが、当時は大騒動でした。その時、十二カ所から隕石が回収され、その総重量は11.5kg、そんな中で最大のものは10,1kgもあったそうです。こんなことはたまたまのことですから、高松クレーターからは、それを裏付けるような隕石衝突で出来るはずの地質変化の跡が見つからないようで、隕石衝突説は無くなったようです。

それにしても約20億トン、早明浦ダム約7杯分の幻の水源とは、水に悩んできた香川にとっては大朗報であることには間違いありません。

他の県の事は余りよく知らないのですが、香川県には五十以上の城があります。城は普通、形式上、平城、平山城、山城、水城の四つに分けられています。ただ、その中で山城と水城の代表格が、この香川にあります。一つが高松城、もう一つが丸亀城です。この高松城が水城で、今もわずかの距離で海に接近していますし、堀には海水が満ちて、黒鯛やその他の海の魚が泳いでいます。昔の悪ガキなど、堀の魚はスレていないので、すぐ釣れると、監視員の目をくぐって釣っていたそうです。その悪ガキの一人、私の叔父がそう言うておりました。

丸亀城は、厳密には平山城です。丸亀平野に日本一高い石垣と、日本一小さい天守閣をもっています。しかし、こういった近代形式の城はさておいて、讃岐の山の中には実戦に備えた城が多々ありました。それは天守閣など持たない、櫓と木の柵、堀とその土で築かれた土塁に囲まれた城です。身近なところでは天霧城があります。善通寺の南、多度津と接する標高382メートルの天霧山の山頂に構えられた城でした。ここを築いた讃岐香川氏は、普段は多度津の桃陵公園にあった本大城で政務をこなしていたそうです。

この城は実際登ってみると、全体では大変でもないのですが、登り始めてしばらくして差し掛かる犬返しの坂は、よほど健脚でも杖を持っていたほうが良いと思わせるきつい傾斜でした。それから、何も予備知識を持たず行くと、迷います。もうここへ登ってこようと思う人もないのでしょうか。道はそれなりなのですが、倒れた木々が放置されていたりして余計に惑わせます。それでも上がりきったところには本丸跡の指標が立ち、二の丸跡にも同様にあります。井戸もあるはずなのですが、見つけれませんでした。私自身は弥谷温泉の側から弥谷寺へあがり、そこから続く天霧城登山道を行ったので、大方は登ってきておりましたから、登山自体は大したことなかったというわけでした。帰りは温泉に入れます。それをもくろんでの天霧城探索でした。しかし、山城を知りたくて登った天霧城は、松山城の華麗さとは違った、凄みのようなものを感じさせました。思い込みでしょうか。

子の天霧城から善通寺に戻る途中に、兜の鉢を伏せたようなこんもりとした山が見えます。甲山城跡です。今は八十八か所の一つ、甲山寺があり、その甲山寺の境内脇から遊歩道が作られています。これも放置されているのがすぐわかりますが、あっという間に登れますので、あっけない思いをしますが、これも城跡探検のひとつと思えば、登る価値ありと納得します。この城は道を挟んで築かれている朝比奈池の名にあるとおり、朝比奈太郎が作ったとされています。そののち、天霧城の出城としての役割を担ってい

たそうです。

善通寺から大麻山を挟んで反対側に、良心市たかせというふれあい市があります。その店の、道路を挟んで反対側に上がっていく道があり、そこをのぼると竹藪が生い茂っています。そこに看板だったか指標だったかで麻城とあります。ここも城跡。小さなものです。長曾我部に落とされました。血塗られたことがあったとおもいます。

四国の山の中に、多くの山城が遺構を残しております。そんな中で取り分けユニークな名前の城が、昼寝城です。このネーミングについて、一説、ここに籠城してしまえば、昼寝していても落城しないということから名付けられたというのがありますが、これはたぶん後付の説ではないかと思えます。しかし、一面、そうかもしれないと頷かせるのが、この城跡のけわしさです。長尾から大窪寺へ抜ける峠の曲がりくねった道に、大窪寺こっちの案内板の上に昼寝城跡こっちの看板も設置されています。車で走ると、軽快に走れますので見逃しそうになりますが、看板も大きめなので注意していれば大丈夫です。

さて、この昼寝城跡の看板のところから登山道は始まります。この山の名前が昼寝山なので、この城の名前もここからきたというのが本当でしょうか。実際登り始めてみると大体二十分ぐらいで到着します。しかし、道は細く、石がごろごろ、笹の葉が積もり、足を取られそうになります。途中、西の丸跡に寒川社の祠があり、この祠の前には、ユーモラスなイラスト入りの「ひるね」と書かれた看板が建っています。まるで落書きの手作り風でしたから、まだあるかどうかははっきりしません。そこからさらにゆくと、まるで左右に下がっている幅広の道に出ます。後で分かったことですが、それは馬場であったようです。そして、その先が東の丸です。こちらのほうが若干広く、土を積んだあともあり、これは土塁であろうと推測しました。その先の尾根つたいに歩を進めると、一部切り欠きのように勧めなくしている部分があり、兵がすすんできた時に、これ以上進むことを困難にするための手法かとも思えます。で、あきらめて引返しました。かといって、そう深いものではないので行こうと思えば行けるものです。時代が重なり、埋まった部分もあるのでしょうから。しかし、ここは本丸には行かず、いやあ、難攻不落の城ですなアと敬意をはらってかえるのが礼儀かと帰りました。城跡探索を多々行ったわけではありませんが、真夏の暑い日、また帰りの温泉が楽しみになる行程でありました。

四国は山国であるといえ、日本はどこも山国であるといわれそうですが、あえて四国が緑の国ではなく、山国であると言いたかったのです。それにしても、四国の穏やかなイメージは、きびしい山国のイメージからは想像の付かないイメージです。しかし、実際はそんなことはないのです。と気張ってみても、いやいや北海道の寒さには到底及ばず、アルプスほどの高い山もなく、あの暖かい沖縄の台風の影響は空恐ろしいほどと、あらゆるところから様々な非難が聞こえそうです。それらについて、そのとおりです、四国は穏やかで災害も少ない、そちら様と比べると良いところですよと言わざるを得ません。しかし、四国も他にもれず、山国なんです。最高峰だって二千mを切る高さしかありませんし、山に雪が降っても除雪車は出ません。カラカラと融雪剤が撒かれるだけです。にもかかわらず、香川県を除いて、四国はそのほとんどが山です。t

と主張しても、四国のことは余り知られていません。今度は、四国は島ですと言い出さなければならぬようです。大体、四国が歴史上、表舞台に立ったことなど、数えるほどしかなかったとおもいます。その端緒は古事記にあるとおり、淡路島のつぎに、四国は生まれております。しかし、それもすぐに忘れられ、ふりかえってもみられません。そして次が、平家滅亡の戦いでありました。よく知られた内容ですが、一部引用してみます。

与一、かぶらを取つてつがひ、よつぴいてひやうど放つ。小兵といふぢやう、十二束三伏、弓は強し、浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり。

まさに名文中の名文です。また与一の武功と源平の心映えの良さが光ります。しかし、ここまでの文章はよくしれれていますが、この後の文章はあえて知られないようにしているとしたか思えません。以下引用。

あまりのおもしろさに、感に堪へざる にやとおぼしくて、舟のうちより、年五十ばかりなる男の、黒革をどしの鎧着て、白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて

舞ひしめたり。伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、

「御定ぞ、つかまつれ。」

と言ひければ、今度は中差取つてうちくはせ、よつぴいて、しや頸の骨をひやうふつと射て、舟底へさかさまに射倒す。平家の方には音もせず、源氏の方にはまたえびらをたたいてどよめきけり。

「あ、射たり。」

と言ふ人もあり、また、

「情けなし。」

と言ふ者もあり。

「御定ぞ、つかまつれ。」でありました。誰の命令でしょうか。もちろん総大将、義経の命令です。これに怒った平家は総がかりで攻めてきます。その時の逸話が弓ながしです。この激しい合戦の最中に、義経は弓を流してしまい、危険をかえりみず、これが源氏の大將の弓かと嘲られては末代までの恥辱だと、必死になってそれを拾い上げます。扇を射落とすのも美学、弓を拾うのも美学、しかし舞を舞った武將を射倒すのも美学でしょうか。「情けなし。」

と言ふ者もあり、です。扇の的と弓ながしのは印象が変わりましたでしょうか。しかし、戦はこうしたものと知らせる一文として、私は是認します。

この後、四国はまた歴史の表舞台から隠れてしまいます。秀吉の四国征伐に加えて山之内一豊の高知移封が付け足しのように出てはきますが、あまりいいエピソードではありません。そして明治維新。この山之内の末裔、山之内容堂と坂本龍馬が表に躍り出ます。それとて、山之内一豊以来三百五十年経ってのことでした。いま四国に語るべき物語はありません。またただの島に帰ってしまいました。どうしたもんでしょう。

お気に入りの温泉と別子銅山 1

マイントピア別子に私は何度行ったことか。ただ建物が大きいだけで、食堂もレトロな造りだけ高い、貧相、おいしくない、メニューが貧弱、一階のおみあげ売り場も何度行っても、常時一緒に工夫がない。二階の階段下にミゼットが飾ってある。3階の温泉は、浴槽がでかくて種類が豊富、少しぬるめで長湯が出来る、とこれはいい。でもしかし、このさほどでもない温泉施設に何度も足を運びました。行くたびに、半分、やっぱりこんなもんかと、そして、解っていたはずだろと思うのですが。

始めて行ったときは、ちょっと感動もしたんです。子供もつれて、ほんの5分の行程の鉱山鉄道にも乗りました。その乗り場の横に砂金採り体験コーナーがあり、子供二人が懸命にやったのですが、きらりと光る小粒のものは一かけらもみつかりませんでした。しかし、この田舎の山奥の温泉観光施設も、実は大変な歴史を持っておりました。

かつて日本は黄金の国ジパングと言われました。そこまで金が豊富に埋蔵されてはなかったけれど、戦国時代の一時期、日本は金の産出量では世界一でした。他の金属資源も、埋蔵量は微量でしかありませんが、その種類の多さでは鉱物資源の見本市と言われるほどでした。唯一、出ないのがダイヤモンドでした。しかし、近年これも愛媛で発見されております。残念ながら、愛媛のどことは発表されておられません。盗掘や混乱があるといけなからとすることです。このように、種類は豊富なんです、日本は。それもこれも、日本は環太平洋火山帯のなかにあり、大変な火山国だからでした。いいのやら悪いのやら。そういえば、鹿児島島の菱刈金山は今も操業しており、ここで算出する金鉱石は世界最高の含有量だということです。つまり、普通は鉱石一トン当たり3gほどなのですが、菱刈金山では1トン当たり平均50gも含まれているのだそうです。そして、その埋蔵量たるや、推定250トンですから、世界でも有数の金山と言えます。これも内緒の話らしいのですが。それにしても、金は一トン当たり3gで採算が取れるのですから大したもんです。菱刈金山は毎年、日本が必要とする金のほぼ全量を生産しているそうです。

また、鳥取の人形峠では、これも極めて純度の高いラジウムが産出しております。そういった事情からでしょうか、鳥取、岡山、香川には、ラジウム温泉が多くあります。白骨温泉何するもので、含有量は鳥取の三朝温泉の方が上です。ただ宿泊料が高い。残念。

お気に入りの温泉と別子銅山 2

お気に入りと言っても、温泉自体はそうでもないんです。しかし、その背景にある別子銅山のものすごさは、是非とも書き記したい。そう思って、ちょっととおまわりしましたが、別子銅山については、下記の通りです。

別子銅山（べっしどうざん）は、愛媛県新居浜市の山麓部にあった銅山。1690年（元禄3年）に発見され、翌年から1973年（昭和48年）までに約280年間に70万トンを生産し、日本の貿易や近代化に寄与した。一貫して住友家が経営し（閉山時は住友金属鉱山）、関連事業を興すことで発展を続け、住友が日本を代表する巨大財閥となる礎となった。

ウィキペディアからの引用です。しかし何故別子銅山が今日さほど注目されないのか。同じ四国に住みながら、私も知りませんでした。そんなもんで、私自身の知識の不足からくるのかもしれませんが、周りもさほど知った人はおりませんでした。

銅山と言えば、足尾銅山鉱毒事件を先ず連想すると思います。別子銅山を紹介する前に、このことを言うておかなければなりません。足尾銅山と比べても、別子銅山は数等倍大きく、かつ長期にわたって洞を算出したからです。別子煙害問題は栃木県の足尾鉱毒問題とともに公害の原点とされ、大変な被害をもたらしました。鉱石に銅と鉄、そして二酸化硫黄が含まれていたからです。近代化した別子銅山では手掘りの時代から比べると、60倍の鉱石を生産することが出来るようになり、それを銅山内で精錬しておりました。それによって煙害が起こり、地域の農民との間で紛争が起こりました。1893年のことです。しかし、足尾と違ったところは、麦、稲の被害が煙害によるものと解ると、精錬所を1904年に新居浜沖合約18kmの無人島美濃島、家ノ島、明神島、鼠島の4島に移転し、中央精錬所としたことでした。しかし、そこでも風向きによっては煙害をもたらしました。それ故、それについての賠償を行い、生産する銅の量を制限するという取り決めも行いました。その後、住友鉱業は独自に硫酸化物対策の技術開発を進め、1929年、ペテルゼン式硫酸製造装置を導入し排ガス中の二酸化硫黄（SO₂）の半量から硫酸を製造し、さらに1939年に硫酸化物をアンモニアで中和する技術（排煙脱硫技術の一つ）を導入して煙害問題を解決したのでした。

しかし、その他にも別子銅山には悲しい歴史があります。今、東洋のマチュピチュと言われている、東成の鉱石収集所付近は銅の精錬のために山全体の樹木を伐採してしまっておりました。そして2時間ほどの豪雨でした。それだけで、その東洋のマチュピチュは壊滅してしまいました。犠牲者約五百人でありました。後にご紹介しますが、この鉱石収集所は今だ三段の石垣を残しております。なにも知らず、車で曲がりくねった山道を走った時、それを見ました。ただ呆然とするのみでした。誰もいない山に、遺構は残っていました。

負の歴史はここまでとします。あの石見銀山より大規模な遺構が、今眠っています。それを紹介しましょう。

お気に入りの温泉と別子銅山 3

先の引用にある通り、この銅山は1690年に発見されました。閉山は1973年3月31日でありました。その間、283年、この銅山は採掘されたのです。江戸幕府はこの銅を重要輸出品として長崎から送り出し。当時、日本は世界でも有数の産銅国でありました。この別子銅山が発見されたいきさつは、ウィキペディアにある通りで、大阪屋の経営する立山銅山で働いていた山師が後の大財閥となる住友家に、足谷山に有望な銅の鉱脈があると売り込んだことでした。文章にするとたったこれだけですが、のちの事を思うと、なんという裏切り、欲の葛藤、でありましょうか。これによって、住友は巨大財閥になりおおせたのです。しかし、住友も、よくぞリスクを取ったことか。その銅の鉱脈の存在を証明する露頭が別子山には残っております。それが教えた銅の鉱床は、山肌に縦2.5キロ、横1.5キロの幅を持っておりまして。中でも地上1.3キロは山頂へかけてのものですが、後の1キロは海面下にありました。標高マイナス1000mと言うと、これは日本人が到達した最大深度であります。ここから産出される鉱石は世界平均の10倍の品位でありました。そして、それを掘り出した坑道は、廃山までに700キロに達してありました。その距離、東京から岡山までに匹敵します。こう聞くと、それだけでも相当な距離と思いますが、江戸から明治初頭は鑿と石頭での手掘りであったことを思うと、気の遠くなるような距離であったことが解ります。

銅の採掘は、山頂付近の標高1200mの高さから始まりました。その一番最初の坑口が今もひっそりと残っております。歓喜坑と、名称が読めました。小さな、背の低い入り口でありました。別な坑道に、江戸当時の採掘の様子をうかがえる展示がありました。地べたに座り込み、先ほどの石頭というハンマーと鑿一本を構えている人形が展示されておりました。その手元を明かすのは、螺灯というさざえの貝殻に燈心をさした灯り一つでありました。坑道も天井は低く、かがんでも頭を打ちそうな高さです。当時の日本人は今と違って背も低かったので、今と比べるわけにはいかないかもしれませんが、それにしても低い。そこを、背に竹かごを担ぎ、25キロの鉱石を背負って運んだのでした。

採掘作業のすべてが人手に頼る者でありました。山の大敵は水です。その水をかい出すのも人力でありました。佐渡の金山で、すまじきものは水かき人足とまで言われた、過酷な労働でありました。水の出た低い採掘現場から、箱樋、はこひ というもので吸い上げ続けました。佐渡の流刑人は、その作業で命を縮めたそうです。

また、運び出した鉱石は山腹の製錬所に運び、そこで銅を取り出しておりました。それには大量の木々が要ります。付近の木は皆切り倒され、周りは禿山になってしまいました。加えて、煙害が発生し、それも木々を枯らしました。しかし、まだ少量生産でありましたから、被害も限定的で治まっておりました。その精錬所で作られた江戸期の竿銅は、ジャパコッパーと呼ばれ、最高品質の銅として、最高の高値で取引されたそうです。なにしろ、ジャパコッパーはローズピンクに輝いていたのですから。

お気に入りの温泉と別子銅山 4

人手に頼る銅の生産も、当初はその品質の良さで競争に勝っておりましたが、西洋の高効率化された銅生産の価格競争力に次第に押され、日本の銅は売れなくなりました。それをなんとかしようと、明治初期、初代別子銅山支配人はフランス人、ブルーノ・ルイ・バロック、当時38歳を別子銅山に招いたのでした。鉱山経営が専門のバロックは、2年契約で別子銅山の効率化を指導しました。現在の価値に直して年俸、約7億5千万円。支配人の名は、メモし忘れていました。

バロックは別子銅山に来て、余りの現状にあきれ果てます。そして懸命に調査し、当時の日本では実現不可能と思われる改善計画を提出します。まず鉱石の運び出しに、今までとは違った、広くてまっすぐな斜坑を掘ること、そしてその斜坑から水平に坑道を掘り、人が立って碎石できるようにすること、それからその斜坑には鉱石を運び上げるケーブルの運搬装置をつくるなどを提案します。

また実際の採掘方法として、電動の削岩機とダイナマイトの使用を採用するように勧めます。しかし、削岩機を使ってみると、ドイツ製だけに重く、大きなものでした。また、それに使われていたドリルは直ぐ破損しました。それをより軽く、強力なものに改良をしてゆきます。それを担ったのが日立モータでありました。

ところがその電気はどうしたのでしょうか。そのために1912年、水力発電所がつくられました。しかし、それがまた突拍子もない方法で作られたのです。そのとき、銅山には山4つ、貫通した坑道がありました。そしてその先に、川が流れておりました。そこから水を引いたので。その水を、当時としては東洋一の落差であった、600mを管でおとし、4機の発電機を回して発電致しました。この発電量も当時の日本のトップクラスでありました。

そして、これによって電動ポンプ、電動削岩機、また電動巻き上げ機が動き出すことになりました。しかし、ダイナマイトの使用は大変難しいので外国人技師を雇うようにと、ブルックは進言したのですが、それでは技術が育たないと言って、逆に日本人を技術修得のために、外国に行かせたのです。

さらに、ブルックの最大の改革がありました。東成の集積所の建設と、山岳鉄道の建設です。標高835mの石ヶ山丈から同1100mの角石原までの5.5km、133カ所の急カーブ、23カ所の橋を作った山岳鉄道でした。これもやはり当時の日本の鉄道技師を総動員しての建設でした。ですから、その当時の最高技術の結晶と言えます。しかしこの標高での建設です。すべて人力で行いました。さらにこれが完成すると、小型ながら蒸気機関車を運び上げ、鉱石の運搬に使ったのです。機関車はドイツ製で相当な重さでありました。これをも人力で運び上げたのです。

さらに驚くことがあります。東成の貯鉱庫です。ここはもう建物は山津波に流されてありません。しかし、三段になった石垣はびくともしないで、残っています。石垣の石は、さほどの大きさには見えませんが。奥に埋まった部分は相当長く、一体約300kg、それが全部で8000個積み重ねられているそうです。ここでは主に女性が一番上の段から降りてくる鉱石を二段目で選別し、三段目に送っていました。そこからは策動、つまりリフトでふもとへおろしたのだそう

です。当時はこの場所に5000人ほどの人が暮らしていました。小学校もあったそうです。そんな名残りがマイトピア別子にある山岳鉄道です。ほんの5分ほどを走ります。鉄橋もわたります。道路は、車でもここまではスムーズに走れます。しかし別子銅山の遺構へは、対向車があると身動き取れないほどの道を走らねばなりません。それから先は自分の脚が頼りです。しかし、石見銀山が世界遺産と言うならば、その規模と言ひ、歴史と言ひ、世界遺産になって当然と思います。

ほんの少しだけ、雰囲気味わうことができます。マイントピア別子、お尋ねになってみてください。緑の国四国が覆い尽くそうとしている明治の勸業遺構が残っています。

お気に入りの温泉と別子銅山 5

別子銅山についてのメモは、ここで終わっています。マイントピア別子、初めは何の気なしに訪ねた温泉施設でした。この大きな3階建ての温泉、お風呂も大きく、子供なら泳ぎたくなるほどです。しかし少しづつ興味を持ちだし、そのうちガイド付きのツアーで歩いてみました。この文章は、そんなときのメモに基づいています。ですから、立て看板とかなら正確ですが、話をメモした分については走り書きですので、間違っていたり、書き損じた部分があります。ご了承くださいませようお願い申し上げます。

四国と徳島のこと

古事記の中で、四国は淡路島の次に生まれたとされるほど重要視されていたことはあまり知られていないことです。つまり、国産み神話にあっては、最初に淡路島が生まれ、次に四国が産れます。そのことは案外に軽視されています。しかし、この順序にはいみがあります。四国は古事記の中で淡路の次に伊豫之二名嶋(いよのふたなじま)の名で産れてきます。そんな話題は以前にもしましたので、徳島についてのみ考えてみます。

古事記にある、伊豫國謂愛比賣、讃岐國謂飯依比古、粟國謂大宜都比賣、土左國謂建依別という原文の中の粟國謂大宜都比賣が徳島のことです。この大宜都比賣神(おおげつひめのかみ)はイザナギの第二子で、食物、穀物の神様でした。ですから、阿波の国が、もとは粟であったことは容易に想像できます。そして、この神様は女神様でした。ところが、この女神様は悲運の神様で、あの乱暴者のスサノウに殺されます。このスサノウの乱暴さはちょっとびっくりします。そのスサノウが空腹に耐えられず、なにか食べさせてくれと、この女神さまに頼みます。すると女神さまはやさしくこれに応え、手に余るほどの食べ物をスサノウに与えてくれます。そしてさらに食べ物を要求してもどんどん持ってきてくれます。不思議に思って、どのようにして食べ物をもってくるのかを知りたくなくて台所を覗きます。すると、女神さまは口、鼻、尻から食べ物を出しておりました。なんと汚いとスサノウは怒り、女神さまを撃ち殺してしまいます。たしかに汚いとは思いますが、しかしその死体の頭からは蚕、目から稲、耳から粟、鼻から小豆、陰部から麦、尻から大豆が発生します。それにしても、なんとも生々しい感じがしますが、そこが古事記の由縁でもあります。

この記述から、阿波の国は大和朝廷に征服された地であり、かつ重要な食料生産地であったことが読み取れます。さらに、今の徳島もそうですが、豊富な木材の生産地でもありました。

じだいがぐっと下がると、昔の三好郡は今三好市に変わっておりますが、この地名の由来となった三好氏は、戦国の時代にあつて小笠原氏の庶流として阿波の国を治めるようになります。さらに、時代の絶対権力者の不在をいいことに京都に進出した三好氏は一時は中央の政治にも関与、征夷大將軍さえも傀儡とするなど、絶大な権勢を誇ります。しかしながら、織田信長が現れ、三好義継が京で滅ぼされると、三好一族である三好長治が阿波を統治することとなってゆきます。そのあたりから、かつての勢力を次第に失い、ついには土佐の長曾我部に滅ぼされます。いまは民営化されて名前も変わっておりますが、かつてかんぼの宿のあつた白地の白地城に立てこもり、懸命に抗戦した三好一族を吉野川の河原で、長曾我部はなで斬りに切り殺しました。そしてその処刑場から山を見上げると、供養寺という名の寺があります。その名の通り、この寺はここで処刑された人々の供養をするために開山した寺でありました。

長曾我部は四国の英雄のようにいわれます。ところが、四国では残虐な侵略者としてしか思われておりません。それをこの処刑が表しています。讃岐でも、西讃地区では仁尾城、東讃おいても、一般庶民までなで斬りに処刑しました。仁尾の海岸は血に染まったそうです。ですから、讃岐の住むものは、いまだに土佐に恐怖心を覚えます。

さて、徳島はこの時代から急速に存在感を失ってゆきます。それでも讃岐はやっとうどん県で知られるようになりましたが、徳島はなにがあるでしょう。阿波踊り、祖谷のかずら橋と、それぐらいしか思い浮かびません。観光のめだまになるものとしてはそんなものです。・・・、と思っているのは私たちこの地にすむものだけであったことが、最近分かりました。認識を改めねばなりません。

四国と徳島のこと 2

認識を改めるといっても、何か新しいものができたり作られたり付け加えられたりによってではありません。徳島は相変わらず何もない県です。鳴門の渦潮も、祖谷のかずら橋も昔からのそのまま、変わったわけではありません。

たしかに消費者庁が引っ越してくるとか、上勝町のつまものなどと、話題はあります。しかし、それはほんの一部。四国の中でも、限界集落が消滅集落になる可能性の一番高い県であることは目に見えています。

かずら橋の上に祖谷村があります。西祖谷、東祖谷。そのなかに落合集落とか阿佐集落などのいくつかの集落があります。落合集落には三所神社、阿佐集落には四所神社があって、それぞれに祭をします。落合は一番下の家から一番上の家までの高低差が四〇〇m。そこに住む人は約一七〇人。それでも神輿を担ぎ、先づれには天狗の面を被った猿田彦が行きます。あの天孫降臨に習っているのでしょうか。神社には幟が立ち、人が集まって神輿を待っています。神輿は村の四〇〇mの高低差を、のぼってくるのです。

落合集落はかずら橋から車でまだ四〇分、上がってこなければなりません。そこにあるのは急斜面の畑だけ。それも、このあたり独特の方法で手入れしなければ、表土が失われてしまいます。鍬でたがやし、一回一回土を持ち上げるのです。そうしないと、雪が降った、雨が降ったで水が流れれば、一緒に土も流れて行きます。薄い表土の下は固い岩盤が直ぐ下にあり、もう何も作れません。春にそこへ こおいしいも を植えます。小ぶりの、四〇〇年前からここで作られてきたジャガイモです。急斜面は悪いことばかりではないようです。水はけがよくて、味の濃い、美味しいものが出来るのだそうです。それを湯搔き、皮をむいて串にさし、味噌をぬって囲炉裏で焼きます。祖谷のでこまわしといいます。でこは人形浄瑠璃で使う人形のことです。囲炉裏の火にかざしたジャガイモの串を、人形のようにくるくると回して焼くので、そういうのでしょうか。

山は高く険しく、それゆえ、徳島藩が出来ても検地もなく、年貢も求められませんでした。人の入っていくのが困難なほどの険しさだったこともあったからでしょうが、南北朝からこのには力のある山岳武士がおりました。阿佐集落は今、一七人ほどしか住んでおりません。その中に阿佐さんという方がいらっしゃいます。平国盛の末裔といわれております。

その阿佐集落の神社には、その国盛が祀られています。そしてその真否はともかく、その横には安徳天皇が祀られています。さらに、この地の墓は墓標がありません。名を秘めよ、知られてはならない、というのがその理由です。平らな石を積み上げた平墓が今も並んでいます。それを当主殿は、伏せ墓と言っておりました。

だからといって、認識を改めようと思ったわけではありません。歴史はあっても、一二〇〇年の重みの積み重なった地に、いまは何にもないのです。でありながら、落合集落に住む夫婦は、
死なん程度に生きていける
と笑います。夫が出稼ぎに行き、妻が子育てと畑を維持し、年取って帰ってきた夫とこの地で暮

らします。水さえ、さらに四〇〇m上の湧き水から自分で引いてこなければなりません。

いやでも、やってもらわんといけん

年取った妻が、年取った夫にいます。冬の保存食づくりを、夫にも助けてもらわねばなりません。干し大根、サツマイモを蒸してこれも干します。大豆を大量に煮て、麴を加え、二カ月熟成させると、このあたりで言う、しよいのみ、醤油の実と思いますが、かなり高たんぱくの保存食ができます。

お金ばかり使わんでも、死なん程度には生きて行ける

冬になると、上の家から雪が舞い、風が吹き付けます。このあたりはもう標高を1000mは超えています。夏、風が吹き、雲が舞っても、足下に見えます。霧が煙るように、下に雨が降ります。雷鳴も、地の底で響き、稲光は眼下を渡ります。二月になると、雪は一番下の家を包み、風が屋根をゆるがせます。

ここを桃源郷と言った人がおりました。日本で一番深い溪谷、祖谷溪。1000mの深さの溪谷です。過疎が押し寄せる集落が桃源郷です。貧しいと思わないでください。日々働くのは、自分が今日食べるものを収穫し、明日食べられるように作るためです。山はこの人たちの宝箱。木々が何に使えるかを知り、用途に合わせて必要なだけ切る。ハゼから蠟を取り、木の葉を天ぷらにして食べる。蔓の皮を剥き、紐にして大根を通す。知恵を持って山のものをいただきます。もうこれでいいじゃありませんか。一膳の飯と自分で作った野菜、山から収穫した食材で十分生きてゆけます。そう思えたら、ここは桃源郷なんです。

そして天空の村 徳島のこと

祖谷山村は、天空の城ならぬ、天空の村といわれております。

山城町は妖怪村と言われています。また、山城町にある賢見神社は犬神憑きを落とす日本随一の神社です。それだからといって、日くつきの神社ではなく、由緒正しい神社であることは間違いありません。仁賢天皇の三庚午年九月(五世紀末)に創建されたと神社明細帳に記されているほどですから。

突然ですが、いまの若い人たちは、新聞を読みません。もちろん、毎日配達してもらうなんてことはしません。本も読みません。それだけを取り上げて、不勉強とか世の中のことを知ろうとしないと言おうと言うものではありません。台所にまな板と包丁もなく、鍋ややかんも持たない人もいます。怠け者というのではなく、彼らは自分の生活に、それらのものは必要ないと考えているのです。ミニマリストと言うようです。固定電話はいらない、世の中のことはテレビやインターネットで知ることができる、テレビの番組表でさえ、テレビに表示されますから、新聞の番組表は必要ないわけです。本も音楽も、ネットからダウンロードすれば安価に読めますし、なにより本棚がいりません。実際本を買ってしまうと、後で再読もしないのに積んでおかなければならなくなります。スマホなりPCなら記憶装置に書き込まれて消えることはありませんし、場所も取りません。そしてさらに、財布さえ持たなくともいい時代になりました。便利といえば便利、希薄といえば、希薄。だんだん生活感の希薄な時代になっていっております。

それでも、だんだん物を欲しがらない世代が生まれつつあることは間違いありません。そうなれば、大量生産、大量消費が基本だった生活形態が崩れてゆくのは当然のことです。そして、彼らが、資源の食いつぶし、環境破壊とかの大義名分を振りかざして、そのような生活を選んでいるのでもなく、ごく自然に自分たちの性向としてそう生きています。結婚さえ同様です。子供をもつことも同じ。なにか、そんな彼らの動向が、これからの世界を決めて行きそうです。どんな時代が来るのでしょうか。

、阿波の国は

古事記の中で、四国は淡路島の次に生まれたとされるほど重要視されていたことはあまり知られていないことです。つまり、国産み神話にあっては、最初に淡路島が生まれ、次に四国が産れます。そのことは案外に軽視されています。しかし、この順序にはいみがあります。四国は古事記の中で淡路の次に伊豫之二名嶋(いよのふたなじま)の名で産れてきます。そんな話題は以前にもしましたので、徳島についてのみ考えてみます。

古事記にある、伊豫國謂愛比賣、讃岐國謂飯依比古、粟國謂大宜都比賣、土左國謂建依別という原文の中の粟國謂大宜都比賣が徳島のことです。この大宜都比賣神(おおげつひめのかみ)はイザナギの第二子で、食物、穀物の神様でした。ですから、阿波の国が、もとは粟であったことは容易に想像できます。そして、この神様は女神様でした。ところが、この女神様は悲運の神様で、あの乱暴者のスサノウに殺されます。このスサノウの乱暴さはちょっとびっくりします。そのスサノウが空腹に耐えられず、なにか食べさせてくれと、この女神さまに頼みます。すると女神さまはやさしくこれに応え、手に余るほどの食べ物をスサノウに与えてくれます。そしてさらに食べ物を要求してもどんどん持ってきてくれます。不思議に思って、どのようにして食べ物をもってくるのかを知りたくって台所を覗きます。すると、女神さまは口、鼻、尻から食べ物を出しておりました。なんと汚いとスサノウは怒り、女神さまを撃ち殺してしまいます。たしかに汚いとは思いますが、しかしその死体の頭からは蚕、目から稲、耳から粟、鼻から小豆、陰部から麦、尻から大豆が発生します。それにしても、なんとも生々しい感じがしますが、そこが古事記の由縁でもあります。

この記述から、阿波の国は大和朝廷に征服された地であり、かつ重要な食料生産地であったことが読み取れます。さらに、今の徳島もそうですが、豊富な木材の生産地でもありました。

じだいがぐっと下がると、昔の三好郡は今三好市に変わっておりますが、この地名の由来となった三好氏は、戦国の時代にあつて小笠原氏の庶流として阿波の国を治めるようになります。さらに、時代の絶対権力者の不在をいいことに京都に進出した三好氏は一時は中央の政治にも関与、征夷大將軍さえも傀儡とするなど、絶大な権勢を誇ります。しかしながら、織田信長が現れ、三好義継が京で滅ぼされると、三好一族である三好長治が阿波を統治することとなってゆきます。そのあたりから、かつての勢力を次第に失い、ついには土佐の長曾我部に滅ぼされます。いまは民営化されて名前も変わっておりますが、かつてかんぼの宿のあつた白地の白地城に立てこもり、懸命に抗戦した三好一族を吉野川の河原で、長曾我部はなで斬りに切り殺しました。そしてその処刑場から山を見上げると、供養寺という名の寺があります。その名の通り、この寺はここで処刑された人々の供養をするために開山した寺でありました。

長曾我部は四国の英雄のようにいわれます。ところが、四国では残虐な侵略者としてしか思われておりません。それをこの処刑が表しています。讃岐でも、西讃地区では仁尾城、東讃おいても、一般庶民までなで斬りに処刑しました。仁尾の海岸は血に染まったそうです。ですから、讃岐の住むものは、いまだに土佐に恐怖心を覚えます。

さて、徳島はこの時代から急速に存在感を失ってゆきます。それでも讃岐はやっとうどん県で知られるようになりましたが、徳島はなにがあるでしょう。阿波踊り、祖谷のかずら橋と、それぐらいしか思い浮かびません。観光のめだまになるものとしてはそんなものです。・・・、と思っているのは私たちこの地にすむものだけであったことが、最近分かりました。認識を改めねばなりません。